

千夜一夜の

ひすとりえ

にころ まきあ

歴史の長さは人間の営みの長さ

人間の感情が織りなす不思議な世界へようこそ

あなたに長い夜に、ほんの一夜の物語を聞かせてあげましょう

目次?

1 日本の不思議な話

2 外国の不思議な話

後書き

一章 日本の不思議な話

孝徳天皇の遠大なる復讐？

当時の朝廷の中で専横を極めた蘇我入鹿を討ったとされる「大化の改新」。

その主役は言うまでもなく中大兄皇子、後の天智天皇です。

教科書や普通の歴史書ではほぼ扱われないのですが、一步マンガやちゃよっと「飛んでる」歴史書に踏み込んだら「中大兄皇子は孝徳天皇の妻である間人皇女（はしひとのひめみこ）と恋愛関係にあった」とする説が当然のように流れております。

この話の元ネタは官製の歴史書「日本書紀」の中ではもちろん触れられておらず、万葉集の孝徳天皇が自分の妻、間人皇后に送った歌が根拠となっています。

金木着け 吾が飼ふ駒は 引出せず 吾が飼ふ駒を 人見つらむか

という歌で、「わたしの馬を、誰にも見せないように大切に飼っていたのに、それを見つけて持ち出していった奴がいる」という意味の歌なんですけど…古代では「見る」というのは性的交渉を意味するんですよね…。つまり「孝徳天皇は間人皇后のことを大切にしていたのに、間人皇后は中大兄皇子の妻になったんだね」という意味がこめられています。

「自分の嫁が他の男に走っていった」と逃げられた方の旦那が喋っていたら、誰もがそう受け取りますよね？

状況的にも、中大兄皇子の政治方針に反旗を翻した孝徳天皇が都ごと難波に置き去りにされて、その時に間人皇女も中大兄皇子に付き添って

いったから、余計に勘ぐられる向きもあるんでしょう。

それだけならまあ良くある話かもしれませんが…大問題は、この間人皇后と中大兄皇子は実の兄妹だってことでして…。

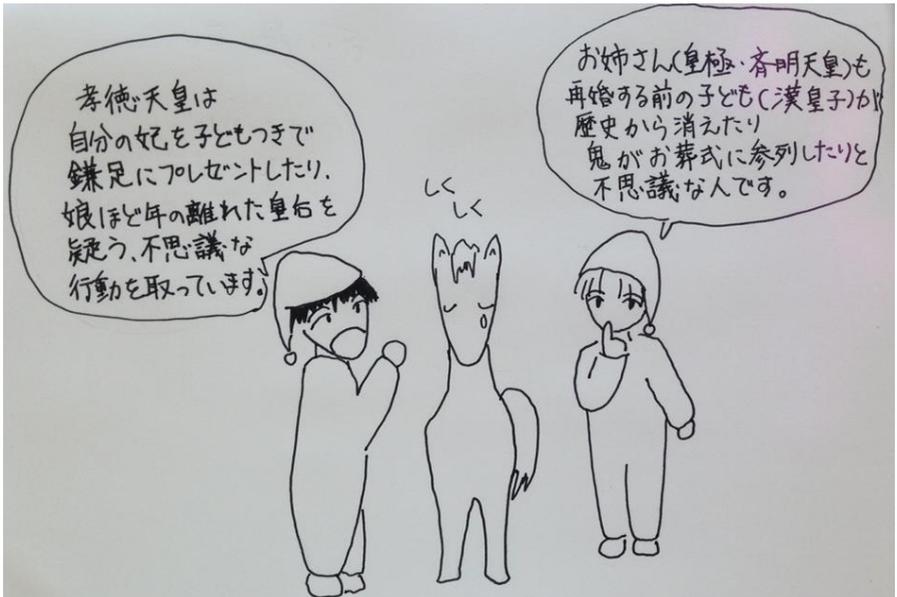
いや、普通に考えたら、こんなことは歴史書には載せられません…。

ただ、この話は犯罪でいうところの「状況証拠のみ」で「物的な証拠」は何もありません。

それこそ、孝徳天皇が自分の境遇を自分の皇后である間人皇后に八つ当たりして、ああいう歌を残したのかもしれませんが。

孝徳天皇はこういう歌を残すことで、未来中大兄皇子があらぬことを書き立てられるように仕向けたのでしょうか？

だとしたら、孝徳天皇って相当な策士だったのかもしれませんがね…。



長屋王と怨霊

崇徳上皇、菅原道真、平将門と、後世に「怨霊」と呼ばれる人達の中に長屋王も含まれると思います。

長屋王とは壬申の乱の主人公ともいえる天武天皇の孫で、奥さんの吉備内親王は文武天皇・元正天皇の妹です。

女性の皇族も天皇に立てられた当時、天皇位に近いが故に藤原四兄弟に罠にはめられ謀反の疑いを立てられ、妻子共々自殺に追いこまれるんですが、その後藤原四兄弟は天然痘で相次いで病死、長屋王を虚偽の告発で自殺に追い込んだ人物も長屋王にかつて仕えていた人物によって劇的な殺され方をしたこと、同時に世間では天然痘が猛威をふるったことで世の中を恐怖のどん底に陥れた…と。

そのために長屋王の一家を無実の罪に追いこんだ聖武天皇は生涯長屋王の怨霊に怯え、救いを仏教に求めていたようです。

長屋王の怨霊を鎮めるために、奈良の大仏が建立されたという説もありますね。

…ところが、大仏の建立には多額の費用がかかったこと、大仏が建立してからもばたばたと人が死んでいくために、民衆には怨嗟の声があらずまいていたと記録に残っています。

ちなみに、長屋王の邸宅の跡地に立っていたのが旧そごうデパートで、そごうデパートは後日「黄金の便器」に象徴される経営者の乱脈経営のために倒産に追い込まれているのですが、「そごうデパートの倒産は長屋王の祟り」とまことしやかに言われていたそうです…。

おーごんの
べんき。



使いい地は
どうだったんだろう？

さて、現代に「怨霊が…」なんて話をすると「そんな、こんな科学全盛の時代に」と笑われて終わってしまう感がありますが、当時奈良の都にうずまいていた「怨霊」はまんざらウソでもなかったようです。

平城京の当時の土壌には多量の水銀が含まれていたようでして、金銅の仏様を作るためには、当時は水銀は必要不可欠だったのです。

ましてや世界最大級の大仏様です。使われた水銀の量も半端ではなかったでしょう。

それが土壌や大気中にとけこみ、都中に水銀中毒をもたらしていた…というわけです。

後に桓武天皇が今でいうところの長岡、そこから京都に遷都をしたのも「政治刷新」というよりは「疫病でどうにもならなくなった都市機能の移転」という側面が大きかったのかもしれませんが。もっとも、長岡京も桓武天皇の実弟、早良親王の怨霊によるとされた二度の洪水で使い物にならなくなるんですが…。

当時「水銀中毒」という概念すらなかったと思います。都中に天然痘と水銀中毒の患者が溢れていた当時、その様相は「怨霊の仕業」以外の何ものでもなかったのでしょうか…。

崇るホトケ

元々は韓国で安置され、儒教による仏教の排斥から守るために日本に保護された仏像を韓国人が盗み出し、それを返す・返さないで話題になっております。

韓国の司法が「仏像を日本に返す必要はない」という判決が降りた直後に起きたセウォル号の事故ですが、ちょうど盗まれた仏像が祀られていた神社に関係のある距離でセウォル号が沈んだ、盗まれた仏様が祟ったのではないかと…という話もあります。

地味に日本の仏様って怖いからね…早く仏像は返した方がいいんじゃないのかと思う今日このごろです。

そんな、日本の怖い仏様のお話をおひとつ。

奈良の大仏様のお話第二弾です。

奈良の大仏殿は二度焼き討ちにあって、消失しています。

さて、その「加害者」たる「焼き討ちした側の人間」がどうなっているかといいますと…ふたりとも、まともな死に方をしておりませぬ。

そのうちのひとり、平安時代末期に大仏殿を焼き討ちした平重衡は一の谷の合戦で捕らえられ、処刑されています。

もうひとり、戦国時代に大仏殿を焼き討ちした松永久秀はもっとすごいというか何というか…。

機を見るに敏、という言葉が相応しい感のある久秀は、仕える主を次々に殺して力をつけていきます。最後は織田信長に仕えるのですが、ある時信長に叛旗を翻します。信長は久秀をじりじりと追いつめ、最後は「お前が持っている平蜘蛛という茶釜と引き換えに命を助ける」と言っていたのですが、久秀はそれを拒否、平蜘蛛と一緒にカラダに爆薬を撒いて

…ちゅどーん。

平蜘蛛はもちろん、秀久の体も粉々になったそうです。

ところで、久秀が亡くなった日は天正5年10月10日なのですが、奈良の大仏殿を焼き討ちしたのはそのちょうどぴったり10年前の永禄10年10月10日…。もちろん、巷では「久秀が死んだのは奈良の大仏様の崇りやで」ともっばらの評判だったそうです。

…確かに偶然とはいえこれは…。

まかり間違っても奈良の大仏にいたずらはしない方がよろしいかと思えますし、仏像を盗んだ韓国の泥棒さんの運命を別の意味でものすごく心配しているのはワタシだけでしょうか？

藤原氏と天皇家の不思議

世界でも類を見ない「天皇家」というシステム。

「政治にほぼタッチしないがために今まで存続できた王家」というのは世界史的に見ても考えられないんじゃないかな?と思います。

古代はさておき、中世から現代に至るまで、天皇そのものが政治に口を出すことはあまりなく、その下にある摂政関白、そして時の幕府の将軍が政治を動かしていたわけなんです。が、どういうわけか天皇が政治に介入するとなぜか天皇家が存亡の危機に立たされることが多い気がします。

古くは崇徳上皇 VS 後白河天皇の戦いで武士を投入した「平治の乱」。平治の乱がきっかけで武士の隆盛が始まります。その流れが平家の隆盛と天皇家の権威の衰退を招き、さらに源平の合戦、鎌倉幕府の設立へつながります。

鎌倉時代、源氏の直系が滅亡したのを機に後鳥羽上皇が鎌倉幕府を潰そうとして見事に返り討ちにされた「承久の乱」があり政治の実権は鎌倉幕府に移り、それから建武の新政では後醍醐天皇の野心のために南北朝が対立し、結局南朝が滅びました。

江戸末期～明治初期に日本は「天皇主権国家」として近代化の道を行っていきませんが、その結末がどうなったかは第二次世界大戦がいっだけ証明してくれたかと思いますが…。

天皇家とそれを中世から支えてきた藤原氏ですが、いつも不思議に思うものはもうひとつありまして、天皇家は「家は長男が継がない」、藤

原氏は「長男が家を継ぐと衰退する」んです。

日本は儒教の影響やら何やらで「長子相続（長男、あるいは正妻から生まれた長男＝嫡男が家督を相続すること）」が多いはずなのですが、天皇家と藤原家に関しては必ずしも長子相続になっていないことが多いのです。

まず天皇家から見てみますと、初代（とされる）神武天皇からしていきなり末っ子ですし、二代目の綏靖天皇も「末子」でした。

桓武天皇の子どもは三人が天皇位に就いていますが、今の天皇は次男嵯峨天皇の系統の子孫になります。

後鳥羽上皇は平家によって擁立された安徳天皇の異母兄弟なのですが、安徳天皇を抜いて考えても、彼も長子ではありません。ちなみにお兄さんは後に「後高倉法皇」となりますが、彼は天皇位には就かずに法皇（出家した上皇）になっています。

末子相続というのは、遊牧民族に良く見られる家督相続方法なんだろうですね。だからといって「天皇家は遊牧民族の出身」と断言するつもりはありませんけど。

そして藤原氏ですが、こちらも初代とも言える鎌足の息子のうち、長男の定恵（じょうえ）は速攻お坊さんにさせられて、唐へ留学します。後に日本に戻りますが、日本に帰国して間もなく「急死した」そうです。

もっとも、定恵の母親はもともと孝徳天皇の側室で、定恵も「実は孝徳天皇の子どもだ」という噂があるのでどうなのか…というところがあります。

藤原氏が大きくなる基礎を作ったのは鎌足の次男、不比等（ふひと）です。不比等には子どもが4人いて、それぞれ南家・北家・式家・京家

という名乗りをしていくわけですが、このうち南家・式家・京家は没落し、藤原摂関政治を支えたのは次男房前（ふささき）の系統である北家でした。

長男武智麻呂の南家は教科書にも載っている乱の首謀者である藤原仲麻呂が出たところであり、彼のために徐々に没落していきます。京家は比較的早い段階で子孫が絶えて没落。式家は桓武天皇の腹心だった種継や百川（ももかわ）がいて、一時期は北家としてのぎを削っていましたが、北家の冬継が権力を握り、式家も没落の道を歩み始めます。

北家の勝利を決定づけた冬継もまた、次男でした。

藤原氏というと、真っ先に思い出されるのは「この世をば 我が世とも思う 望月の 欠けたることも なしと思えば」という和歌を作った藤原道長かと思いますが、彼ももちろん北家の出身で四男です。お兄さんが次々と早世したために、末っ子の道長が一族を背負って立つ立場になっちゃった…というわけです。もうひとついえば、道長の父親兼家も次男でしたが、兄兼通を抑えて一族を束ねる立場として権謀術数を使って時の朝廷に君臨していました。

では、藤原氏の長男はどうなのか?と言いますと…長男が一族の権力を握る時には、なぜか妙に藤原氏が存亡の危機に立たされることが多いのです。

藤原氏の権力の絶頂を極めた感のある道長の次は頼通（よりみち）、道長の長男だったわけですが、この方は「どういうわけか」天皇のお嫁さんにする女の子が授からず、養女を天皇のお嫁さんに送り込むのですがやっぱり子どもを産めず、早々に引退に追いこまれます。この事態がきっかけとなり、天皇家は上皇というシステムを強化して藤原摂関政治

からの脱却を図っていき…それは武士の台頭へとつながり、時を同じくして、藤原氏は残ったものの権力は武士に握られるようになっていきました。

もうひとつ、「藤原氏の長男が権力を握った」有名なのは藤原時平でしょうか。この方の政治的なライバルは、現代では天神様としても有名な菅原道真です。彼は道真を陥れ、時の醍醐天皇にあることないこと言いくって無実の罪を着せて道真を太宰府に追放するわけですが…その後、怨霊と化した道真に崇られるかのように醍醐天皇の皇太子（つまり子どもや孫）が相次いで病死し、時平も当時としても若い39歳の若さで病死します…もちろん、巷では「道真の怨霊に崇られて死んだ」とまことしやかにささやかれていたそうです。

その後、こんな話を聞いたらさすがに現代を生きるワタシですら「怨霊はいるのかも…」と思わず背筋が寒くなるのですが、ある日、天皇の御所で会議をしようとしていたところに落雷が発生し、醍醐天皇の目の前で公卿四人が死亡、三人が重傷のやけどを負います。落雷にあった公卿はみな、道真の失脚に関わった人間ともいわれていました。

それを目の当たりにした醍醐天皇はそのまま意識を失い、意識が戻ることなく三か月後に崩御します。さすがにこんなことがあったら、誰もが「無実の罪で死に追いやられた道真が天神様の力を借りて崇っている」という噂が広がっても、現代ですら否定はできないんじゃないかと思うんですよね…。

さても不思議な天皇家と藤原氏。謎が解けるのはいつになることやら…。

平城天皇をめぐる女達

平城天皇は桓武天皇の長男で、幼いころは安殿（あて）親王と言われていました。

俗にいう「薬子の乱」の首謀者(?)でもあります。

安殿のお父さん、桓武天皇は本来は天皇になれる人ではなかったのですが、異母兄弟で皇太子だった他戸（おさべ）親王とその母親井上（いがみと読むらしいです）皇后を「明らかにそれ、無実の罪だよね?」というやり方で追放と死に追いやり、天皇への道を進み始めます。

桓武天皇の父、光仁天皇は桓武天皇の次は桓武天皇の弟、東大寺の長官でもあった早良親王を皇太子に指名し、次期皇位を望んでいたのですが、桓武天皇は親の情もあって自分の息子、安殿に皇位を譲りたかったようです。

早良皇太子も後に謀反の計画があったということで捕らえられ、無実を訴えてハンガーストライキを起こしますが死亡し、桓武天皇の思惑通り、安殿が皇太子になりますが…安殿からしてみたら、他戸親王、井上皇后、早良親王から恨まれる立場になってしまいました。さらに天皇に即位後、父の桓武からかわいがられていた…と安殿は思いこんでいた、異母兄弟の伊予親王とその母、藤原吉子も謀反の疑いありと自殺に追いこみました。

このふたりも怨霊になり、安殿に祟ったと言われていています。

そして、安殿とその子孫はまさに「怨霊からの報復」を受けたかのような人生を歩むことになっていきました。

…平城天皇の「女性」と言えば、やっぱりこの人、藤原薬子でしょう。薬子は藤原種継、かつては父親桓武の側近にして長岡京造営の立役者だ

った人物でもあります。

よく知られていることではありますが、この薬子さんは平城天皇よりずっと年上で、平城天皇の他に旦那がいて、さらに藤原葛野麻呂という男性とも浮気をしていたという説もある、ものすごい人です。

薬子の娘も平城天皇の奥さんになっておりまして…。

日本で「魔性の女」といえば、
薬子さんと璋子さんだ”と思います。



鳥羽天皇の妃なから、
夫の祖父(!!)白河法皇の
子(後の崇徳上皇)を生んだ”と
される藤原璋子さん。

あとは額田王か淀様
でしょうか。

平安時代のスキャンダルな話は
現代以上にインモラルな上
当事者に反省の色がないので
とても暗い気持ちになります。

当時皇太子だった安殿と薬子のちょっと以上人に言えない関係に父親の桓武天皇は激怒し、薬子を宮中から追い出してしまったそうです。

さて、ワタシが気になる平城天皇の「奥さん」は「自分の娘の婿をたらしこんだ（いつ書いてもすごい話だな、これ）」薬子ではなく、朝原（あさはら）内親王。平城天皇の異母兄弟で、父親はもちろん桓武天皇ですが、お母さんは酒人（さかひと）内親王と言い…な～んと、桓武天皇の立太子の陰で死に追いこまれた井上内親王の娘で他戸親王の実の姉です。

個人的には酒人と朝原に流れている「血統」がほしかったんだと思いますが、自分の母と弟を殺したとしか思えない男に嫁ぐのはどんな気分だったのか…想像するだにお気の毒に思います。しかも朝原内親王になると、旦那は自分の母親くらいの女性に夢中になり、他の奥さんを省みないわけですからいやはや何とも。

なお、朝原内親王は「薬子の乱」では平城天皇と行動を共にせず、3年後には異母兄弟の大宅内親王と一緒に平城天皇の妃の位を辞しています。簡単にいうと「離婚」ってことになるのでしょうか。ふたりの間に子どもはおらず、朝原内親王の死で聖武天皇の血統は途絶えます。

記述は前後しますが、伊予親王と藤原吉子の怨霊に悩まされた平城天皇は弟の嵯峨天皇に譲位し、皇太子には自分の息子、高岳親王を立てます。そして奈良の都で薬子と一緒に暮らしておりましたが、嵯峨天皇の政治改革を不満に思っ挙兵。これが世に言う「薬子の乱」になります。

薬子の乱に破れた薬子は毒を仰いで自殺、平城天皇は出家して何とか罪を許され、生涯奈良で薬子のことを思って亡くなったそうです。

高岳親王はもちろん皇太子を廃され仏門に入り、老年になると修行のために唐に渡ります。さらに仏教の発祥の地、天竺（インド）を目指して旅をしますが…途中で虎に食べられて亡くなったと言われています。

平城天皇の孫のひとりには、伊勢物語で有名な在原業平（ありわらの

なりひら) もいます。

彼も結局政争に巻き込まれ、不遇な一生を過ごしたようです。

井上内親王、他戸親王、早良親王、伊予親王、藤原吉子…怨霊と言われた人達の霊は、この結末に何を思ったのでしょうか…。

騙し討ちの創世神話

戦後、「日本は外国で野蛮な侵略行為を働いていた卑怯な国」という論調がまことしやかに流れておりました。

わたし自身は別の考え方があって、それを今の段階で口にすることは自分の身を危険にさらしそうなので止めておきますが、中国や韓国の人が「日本は卑怯な国」というのは、あながち根拠のないことではないというか、そう思われてしまっても仕方がないと思うところはあります。

その根拠とは…古事記と日本書紀。

戦前には「金科玉条」とまで言われていた日本最古の歴史書ですね。

古事記と日本書紀、いわゆる「記紀」をよくよく読んでみると…「騙し討ち」をして、さらにそれを「王者の徳が感じられる、素晴らしいことですね♪」とばかりに讃えているケースがやたら多いのです。

みなさんも何となくでも聞いたことがあるんじゃないかと思うのは、古事記の中で大活躍しているヤマトタケルの熊襲征伐でしょうか。

ヤマトタケルは父である景行天皇の命で熊襲(今の九州地方)に赴き、人格者であったと思われるクマソタケルを「女装して」、油断したクマソタケルを暗殺します。

その後、出雲ではイズモタケルと水浴びをした際にイズモタケルの刀を偽物と交換して、水浴び後に太刀あわせ(剣による試合的なもの)をして、偽物の剣で刀が抜けないうズモタケルを斬殺しています。

さらに時代が下がると応神天皇と神功皇后は新羅征伐の後大和の地に帰還し、異母兄弟と戦争をしています。

その時は「応神天皇は死んだ」とデマを流し、死体を乗せる船を出して敵の油断を誘って戦争に勝ち、応神天皇として即位します。

日本の神話とも言える記紀がこんな話のオンパレードならば、良く言えば「奇策を弄する」「知略に富む」「最小の犠牲で最大限の効率を狙う」ということになるのでしょくけど、見方を変えたら「汚い勝ち方を選ぶ」「卑怯な手を使う」と思われても仕方がないと思うんです。

特に韓国は日本に併合されているので記紀を読む機会もあったはずですし、韓国併合の少し前には、李氏朝鮮の皇后である閔妃（ミンピ）が日本人によって暗殺されています。

そのことで、韓国の人々が「日本人は神代の昔から卑怯な手口を使う」と思うのも仕方がないのかな？なんて思います。

それにしても…普通の創世神話というのは、大抵正々堂々と敵を倒して国を造り、王権を樹立します。

日本では、最高神は弟の暴力を恐れて引きこもるわ、ライバルの討伐は孫と部下に押し付けるわ、初代天皇の最大のライバルを倒したのは未来の奥さんの父親だわ、敵を討伐するなら騙し討ちをするわ、そしてそれを肯定している。

ここまで正々堂々としてないことを誇りにしている創世神話っていうのも、世界を見てもなかなかないと思うのは気のせいでしょうか？

日本以外で「敵をだまし討ちして
すごーい♡」をやってるのは
ユダヤのダビデ王のところ
くらいではなからうかと。



これ、
巨人ゴリアテ
ダビデ王じゃない

それでも日本ほど
露骨では
ございませぬ。

えいっ



がぁー

そうか、
だから
日ユ同祖論
があるのか〜



んはわけ
ないって。

二章 外国の不思議な話

敵の神とは何ぞや？

世の中に戦争の種はつきないものでございますが…。

歴史を見ていると、「カネや領土」といった目に見えるものより「神」という、目に見えないものが原因になっている戦争の方が残虐度がひどいように思います。

特に一神教にその傾向が強いと思いますが、「神」という絶対的な正義の下に戦う戦争というのは「相手は悪魔」という図式になってしまうので「悪魔を退治する神の使い」という勘違いが起こりやすく、結果「そんなことは悪魔だってやらないんじゃ…？」と思うくらいに残虐な行為に走りがちなんです。

さてさて、では「悪魔」と呼ばれた存在ってどういうものなんでしょうか？

それについて興味深い示唆を与えてくれるのがヒンズー教とゾロアスター教の神々です。

まず、ヒンズー教の影響が今でも色濃く残るインドの神々の総称は「ディーバ（ディーヴァ）」、悪魔の総称は「アスラ」。

そして、今ではイスラム教に飲みこまれてしまった感のあるゾロアスター教（拝火教）の最高神は「アフラ・マズダ」、悪魔は「ダエーワ」。

アスラとアフラ、ディーヴァとダエーワ、何だか語感が似ているように思いませんか？

…はい、実は、インドの神様はインドでは「神様」なんだけどゾロアスター教では「悪魔」になり、その「悪魔」はゾロアスター教では神であって、インドの神の方が悪魔…というわけなんですよ。

今もゾロアスター教の影響が強かったパキスタンとインドは元々は同じ国だけど宗教の違いから分裂し、今も仲が悪いのは有名なことですが、今よりずっと昔にもやっぱり同じようなことがあったと言われていきます。

その時に今のバラモンの人達が信仰していたのがインドの神様で、パキスタン地方に国を作った火を神聖視する人達が信仰していたのがゾロアスター教で、お互いの神様のことを悪魔に仕立て上げていった…というわけですね。

「悪魔」を意味する英語の「サタン」の語源はヘブライ語の「シャターナ」という言葉で、これは「反対者」を意味します。

要は自分に反対するものの神が悪魔になる、というわけですね。

キリスト教の有名な悪魔のほとんどに元ネタとなる神がありまして、蠅の王ベルゼブブはメソポタミア神話の最高神バールのこと、アスタルテも同じくメソポタミア神話に出てくるイシュタルのことだったりします。

唯一語感で結びつかない悪魔がルシフェル（ルシファー）で、結びつくとしたら、北欧神話の神、ロキくらいだと思うんですけど…違うような気もするし。

神の存在は、未だに科学的には証明されていないのですが、神様が実際に人間の前に現れて、しかも今まで「悪魔」だとされてきたものが神

様だったとしたら、いったいこの世はどうなってしまうのでしょうか。

また、ルシフェル（ルシファー）はかつて太陽系の惑星を引っ掻き回した金星に例えられています。一体ルシフェルとは本来は何の神だったのでしょうか？

デブ専皇帝が世界の価値観を変える

一国を傾げるくらいの美女を中国の言葉で「傾国の美女」と言います。中国の歴史で「傾国の美女」として真っ先に連想されるのが唐の時代の楊貴妃ではないでしょうか?玄宗皇帝をたらしこんで安祿山の乱を引き起こした悪女、あるいは悲劇の女性と言われておりますね。

ところが歴史をよくよく見ると、安祿山の乱は傾国の美女が引き起こしたことに對して否定はしませんが、「楊貴妃＝傾国の美女」というのはちょっと違うんじゃないかと思えます。

「傾国の美女」を探す前に…玄宗皇帝というと「老人になって息子の嫁（楊貴妃）を奪って女に溺れただらしない皇帝」と思われがちだし、そう思われても仕方がないとは思いますが、若い時の玄宗皇帝、本名李隆基さんは本当に英雄だし名君でした。

唐は一時期則天武后に乗っ取られ「周」という国名に変わりました。幸いなことに則天武后の死後には「唐」に戻ったわけですが、その後も隙あらば母親と同じように国を乗っ取る気満々の則天武后の娘、太平公主（公主＝日本で言うところのお姫様という意味で、「こうしゅ」と読みます）と渡り合い、ついには太平公主一派を壊滅させるという大武勲を打ち立て、政治では「開元の治」と呼ばれる善政で唐の全盛期をもたらしました。

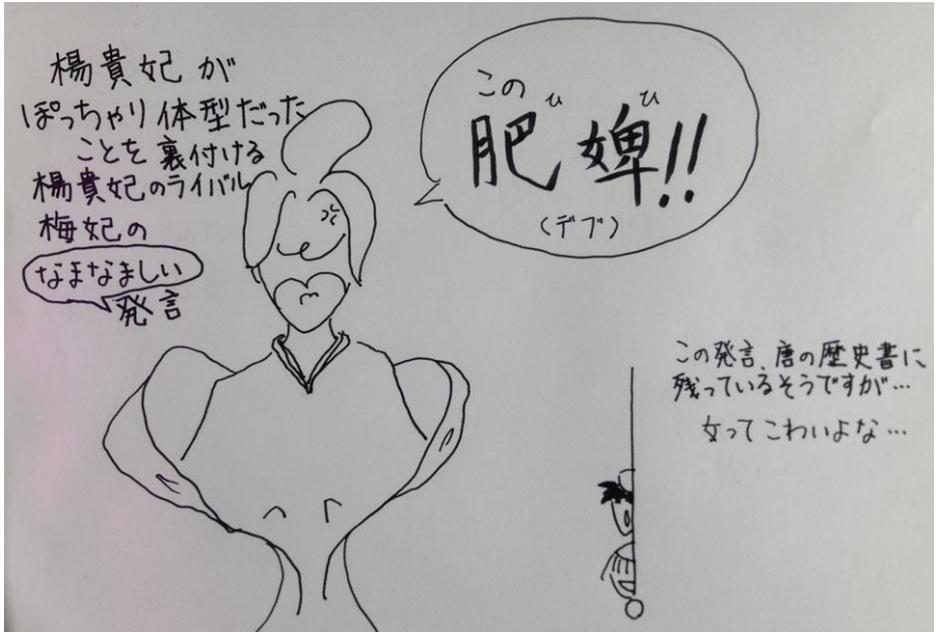
そんな働き盛りの玄宗皇帝にはお気に入りの女性がいました。

「楊貴妃でしょ？」と答えたあなた、ハズレです。

「武恵妃（ぶけいひ）」と呼ばれた女性で、則天武后の従兄弟にあたる方で、玄宗皇帝の子どもも産んでいます。

そのうちのひとり、寿王・李瑁（りぼう）は楊貴妃の最初の夫です。
この武惠妃さんは良く言えばぽっちゃり体型、悪くいうと太めな方で
ございまして…

どうも、玄宗皇帝は今の言葉で言うと「デブ専」だったみたいですね。



玄宗皇帝は武惠妃のことを本当に愛していて、皇后することを望んで
いたようなのですが、武惠妃は唐を乗っ取った則天武後の血筋というこ
とで皇后にできず、武惠妃は自分の息子、李瑁を次の皇帝にするために
裏で色々とがんばっていたようです。

しかし、そこは名君だけあって李瑁の素質を見抜いていたようで皇太
子にはしない玄宗皇帝。

そんな中、武惠妃は亡くなります。

悲しみに落ちこむ玄宗皇帝。

その最中、玄宗お気に入りの宦官、高力士は武惠妃そっくりの女性を見つけました。

その女性こそが愛する武惠妃の息子、寿王・李瑁の妃であった楊貴妃だったわけです。

その後はみなさんも良く知る通りなんですけど…となると、唐を滅亡の淵に追いやった真の「傾国の美女」は楊貴妃ではなく武惠妃ということになるんじゃないかと思います。

実際、楊貴妃も政治にはほとんど口を挟んでおらず、むしろ「皇太子問題」という後継問題に口を挟んでいたのは武惠妃の方でした。

とは言いましても、若いねーちゃんににうつつを抜かして政治をおろそかにしたのは玄宗皇帝で、その玄宗皇帝を良いように使って国政を壟断したのは李林甫と楊国忠であることは否定できませんね。

この話を聞くといつも思っちゃうのが寿王・李瑁の好み。

母親と瓜二つの女性を妻に迎え入れた李瑁って、実は相当のマザコ…いや、これ以上はやめておきましょうか。

さて、そんな「デブ専」玄宗皇帝の女性への好みは、唐以外のアジア諸国にも影響を与えます。

日本の奈良時代から白鳳時代にかけて、比較的ふくよかな女性の絵が残されていますね。

あれは玄宗皇帝の好みから影響を受けているんだそうですよ。

女性への愛で、世界の価値観を変えた皇帝のお話でした。

古代中国の官僚の努力と苦勞を感じるヒトコマ

古代中国では「文字に靈力が宿る」とされて、皇帝の名前を書くことは固く禁じられておりました。今でいうなら、安倍晋三さんが皇帝になったとしたら、日本全部で「安・倍・晋・三」の文字が使えなくなるわけでした…どれだけ大変なことになるかは想像にするにあまりあるかと思えます。

スーパーのチラシに「安い!!」と書いてはいけないし、算数や数学の教科書は全面改訂を余儀なくされ、古代中国に「晋」という国がありましたが、その「晋」という文字も書けなくなりまして、同じようなことがあった時に、その国を別の名前で呼んだり書いたりした…なんてこともあったそうです。そこにいちいち対応せざるを得ない当時の中国の官僚さん達の苦勞を思うと…。

さて、時代は聖徳太子が飛鳥に住んでいたころに遡ります。お隣中国は隋と呼ばれて、煬帝という皇帝の治世でございました。煬帝様は悪政を敷き、二代目にして隋は滅び、実は煬帝の母方の従兄弟だった李氏の天下となりました。

その二代目の皇帝の名は「李世民」、後の世には太宗として知られる、中国史屈指の名君であります…如何せん名前がまずかった。

「国民」「民衆」「治世」「世間」「世界」「世論」と公文書にすら書けないんですよ。

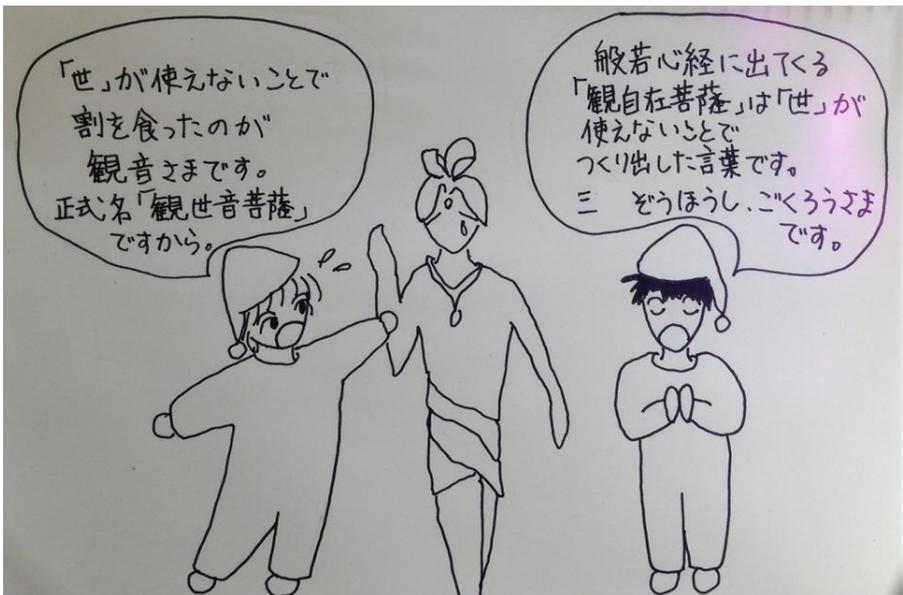
李世民さんが名前を付けられたときはまだ隋は勢力が盛んで、まさかこの子が隋の混乱を治めて皇帝になるなんて親でも考えなかったでし

よから、誰が悪いというわけでもないのですが、官僚はとても困ったことは簡単に想像できるような…。

唐の官僚は「国民」「民衆」「治世」「世間」に相当する別の言葉を考えて、何とか国を統治していったわけです。

なお、唐では「年」という漢字がついた名前の皇帝もいて、「〇〇年」と書くところを「〇〇載」と記入して乗り切ったらしいです。

官僚達の苦労はさておき、ある人の台詞ではないですが、「世民」という名前はその後の彼の人生を暗示していたと思わざるを得ませんね…。



強くて弱いポーランド

「ポーランド」と言えば、こんなことを言ったら申し訳ない気もしますが 19 世紀には何度も世界地図から消滅していたとか、シヨパンは滅亡の危機に立たされている祖国のために曲を作っていた…という印象が強いですね。

第二次世界大戦でも、真っ先にドイツに併合されてしまうという悲しい歴史もあります。

ですが。

中世ポーランドはとても強い国でした。

いったいどれくらい強かったのか？

…世界最大の領土を持っていた国といえば、チンギス・ハンとその子孫が率いるモンゴル帝国なのですが、そのモンゴル帝国を撃破して、追い返すくらい強かったんです。

日本も元寇でモンゴル軍を二度の襲撃から防衛していますが、あれは海という天然の要塞に囲まれていたことと、暴風雨の時期（台風？）だったこと、モンゴル軍は海に慣れていないために海戦に弱く、日本に攻めて来たときの軍編成は通常とはかなり異なったものだったという、日本にしてみたら「良い条件が揃っていた」んですね。

ポーランドは陸地に囲まれた国で、モンゴル軍を野戦で撃退しています。当時最強の軍事力を持っていたモンゴル軍を野戦でぶちのめすって、どんだけ強かったんだ？と。

モンゴル軍の強さは
馬を使った機動力と
弓の破壊力に
ありました。

実際に、モンゴル軍が
勝てなかったのは、
モンゴル軍より弓の性能が
良かったところです。



日本も
そのひとつ
です。

ナンキン健康に良いけれど

昔はカボチャのことを「ナンキン」と読んでいましたが、今「ナンキン」といえば中国の都市名が最も有名かと思います。

漢字で書くと「南京」。

都市として発展したのはかなり古く、三国志に出てくる「健業（けんぎょう）」が今の南京に相当します。

さらに時代が下がると「健康（けんこう）」という、とても身体に良さそうな都市名で登場します。

…が。

「南京」「健業」「健康」と名前は色々変わりますが、どういうわけか南京を本拠地にした政権は長続きしません。

三国志の呉を見てもわかる通り、そもそも魏と国力の差は激しかったのでいずれは…というのはあるのですが、結局呉の国のお家騒動が原因で国は滅亡、魏そして魏から変わった晋へ吸収されていきます。

中国の南北朝時代でも、健業・健康と名前が変わっても今の南京に本拠地を置いた国はため息が出そうなくらいおバカな君主と御家騒動がつきまとい、結局は北の政権に吸収されていきました。

太平天国の乱も首都は南京でしたね。

お約束というか何というか、「洪秀全というキリストの弟の下で、キリスト教的な理想の国を創ろう」という理想とは裏腹に内部は腐敗まくって自滅するかのよう崩壊していきました。

とにかく、中国の首都は長安、洛陽、燕京（今でいうところの北京）

あたりに落ち着きます。

その理由は風水のせいなのか、何なのか…。

ナンキン（カボチャ）なら健康に良いけれど、皇帝にとって南京は健康に悪い…というお話でした。



オーパーツな知識達

「オーパーツ」とは「場違いな物体」とでも言いましょうか、その歴史と技術だったら、絶対そこにありえないよね?というモノのことです。

例えば、「恐竜の化石と一緒にあった、人間の足跡の化石」とか「〇億〇万年前の地層から出てきたボルト（ナット）」というものです。

新しい時代のものになると、首をひねるようなものもあります。

例えば…

コロンビアの山の中から出てきた「黄金ジェット」

南極の海岸線の状態がわからない時代に、南極の海岸線を正確に模している「ピリ・レイス地図」

南アメリカで発見された、あまりにも精巧な「アンナ・ヘッジズの水晶のドクロ」

などなど。

さて、紀元前 4,000 年あたりから栄えたシュメール文明の天体図には 10 個の惑星が載ってます。

水星・金星・地球・月・火星・木星・土星・天王星・海王星・冥王星
…あれ？

土星までは肉眼でも確認できますが、天王星より遠い星が確認されたのは 18 世紀以降なんですけど…。

アフリカのドゴン族には「トロ」という星の話が伝わっています。

「トロは宇宙で一番明るい星で、そのそばにはポ・トロという一番重い星がある。

そのふたつの星は、ニャン・トロという、もっと別の星を100年周期で回っている」。

ここでいう「トロ」は天狼座のシリウスのことなのですが…普段わたし達が目にしているシリウスは「シリウス α 」で、伴星「シリウス β 」という、小さいのですが非常に質量の重い星と一緒に「シリウスC」という、とても大きな星の回りを100年周期で公転しています。

…問題は、シリウスの構造が科学的に判明したのは19世紀だってこと。

じゃあ、ドゴン族のみなさんは、一体どこからシリウスの公転周期についての知識を得たのか？

ギリシャの哲学者、プラトンの著書「クリティアス」「ティマイオス」にはこんな記述があります。

『ヘラクレスの柱の向こうには別の大陸があり…』

ここでいう「ヘラクレスの柱」とはジブラルタル海峡のことで、「別の大陸」とはアメリカ大陸のこと。

マルコ・ポーロがアメリカ大陸を発見したのはプラトンの時代から下がって1000年以上は経ってるはずですが…。

そもそも「人類最古の文明」であるシュメール文明がいきなり完成された形で登場しているって時点で、人類の進化のあり方を不思議に思いますわ…。

占星術と文明

太古の巨大建築に必要なだった知識は数学と幾何学と天文学だったそうですね。

数学は言うに及ばず、巨大建築物であるが故に地盤の問題を考慮しなければ幾何学と天文学の知識があれば測量はできた…ということだったようです。

さて、かつて一般的な「天文学」とは「占星術」として広まってきました。

太陽が一年かかって運行する星座のことは、星占いでよくいう「12星座」で、「春分点」といって夜明けに地平線上に見える星座が2000年に一度切り替わります。

その度に、示し合わせたように人類は進化の方向性を大きく切り替えていくんです。

今から約6,000年前、紀元前4,000年あたりに春分点があったのは牡牛座でした。

その時に栄えたのはクレタ文明、シュメール文明、初期のエジプト文明など比較的温和な文明が繁栄しています。

その牡牛座の象徴は「温和」や「粘り強さ」を意味し、女性的な象徴でもあったりします。

実際、この時代は男性の神様より女性の神様が重視されていたようです。

春分点が牡牛座から「攻撃性」「男性」を意味する牡羊座に移ると、

温和なエジプトは拡大路線に入り、クレタ文明は衰退し、シュメール文明は父権性の強いアッカドやバビロニア、ペルシアに支配されます。

そこに鉄器を使うヒッタイト文明の興亡があり、ユダヤ人の民族移動もこの時期だと言われていますね。

さらに時代が下がり春分点が魚座に入るところ、中東はベツレヘムというところでひとりの赤ちゃんが産まれます。

イエスと名付けられたこの子はユダヤ教に大きな変革をもたらし、彼の改革したユダヤ教はユダヤの国に留まらず、世界的な広がりを見せていきます。

みなさまもご存知のイエス・キリストですね。

ごく初期のキリスト教は十字架ではなく「魚」がシンボルだったようです。

そしてつい最近、2000 年ごろに春分点は魚座から水瓶座へ移りました。

水瓶座の象徴は「情報と伝達」「革新」。

2000 年前後に爆発的に普及したのが…まさに水瓶座の象徴とも言える「インターネット」です。

インターネットがきっかけで「ジャスミン革命」が中東に吹き荒れたのも、みなさまの記憶に新しいかと思います。

あと 1920 年ほど、水瓶座の春分点の下で人類はどんな方向に進み、そして次の山羊座の時代を迎えるのでしょうか？

あとがき

「千夜一夜のひすとリエ」では歴史の話をしていますが、そこにいるのは「人間」なんですよ。

泣いて、笑って、恋をして、自分や家族、そして大切な人の幸せを願って…という、大多数はごく普通の人間です。

それが時には、歴史の転換期で大きなことを成し遂げたり、悪役となって消えていったりしているけど、それも飲みこんで、今この時も、未来には「歴史」と呼ばれるものになります。

これを読んでいるみなさんが「歴史」という時間の流れをどのように関わるのか、またみなさんの未来がどうなっていくのかはわかりませんが、みなさんが良い人生を歩んで、それが「歴史」として未来に語り継がれていくことを祈ってます。

この本をここまで読んでいただいて、本当にありがとうございました。

にころ・まきあ

にころまきあは
「君主論」の
ニコロ・マキャヴェリから
とってます。

裏表紙も
見てやって
ください。

にころ →

← まきあ

ありがとう
ございました。

